

【9月28日】

学生生活関係教職員研修会（9/24）での土井隆義先生の講演に関連して

作成者：想田瑞恵

想田（以下S）：「人の役にたてた実感が、関係のための関係ではなく目的のための関係を築くきっかけになる」と言っても、人の役に立つことより自分が傷つかないことのほうが大事だから困っているのですが。

檜垣先生（以下H）：確かに、やさしい関係の克服において「人の役に立てて嬉しい」という気持ちを重視していたけれど、最近の若者のほうがボランティアとかしているでしょ。

S：言い方はよくないですが、きっとボランティアは気楽な面もあるんだと思います。日常における親切は、本当に相手のためになっているのかわからない。おせっかいかもしいない。でもボランティアは、「いいこと」の枠が決められているから、そういう葛藤も無い。枠の中で善行を積み上げていく感じですかね。

H：見えてきたんじゃないですか。喜ばれて当然だし、喜ばれないとか嫌がられたりしたら、それは向こうが悪いということになる。結局異質な他者と向き合おうとしていない。

\*\*\*\*\*

H：「入学式前などに友人作りを大学が支援するということは、やさしい人間関係を大学側が助長するということにならないか」という指摘をしました。入学式前に話す機会を設けても、人間関係を「やさしく」作らせているだけで、「一人でいられない」という状態の改善にはならないのでは。

永延さん：入学式前にSNSでコミュニティを作らせるという記事を読みましたが、場所がネットに移っただけで同じことですね。3分の2くらいの学生が参加しているそうですが、今度は「それに入らないと友達ができないのでは」という気持ちが生まれてしまう気がしますね。

H：その通りだと思います。真綿で包んで対立を避けて、どこまでも人間関係をフラットにしようとする。入学式前のコミュニティに入る前のコミュニティができたりしてね。それでは、問題の解決にはなりませんね。

\*\*\*\*\*

H：「便所飯」というのは、やさしい人間関係をめぐる問題を見事に概念化していますね。一人で食べることや一人でいることが嫌なのではなく、一人でいるところを誰かに見られるのが嫌なんですね。

S：そうですね。一人でいられないわけではない。一人旅だってできる。でも、学食など誰かと居るべき場所に一人でいることがつらい。「一人でいるのは友達が居ないから、友達が作れない奴だからなんだ」と思われたくないので、一人でご飯を食べるときには、「あえて今一人なんだ」や「友達がいないわけではないのだ」、「かわいそうな奴ではないのだ」と、オーラで訴える。これがひどく疲れる。

H：確かに以前は「一人でいることがかっこいい」という感覚がまだ残っていたしね。一人でご飯を食べていたら「ニヒルだ」と言われたこともあったのに、今は、対話が上手くいっていた大学でも「何で先生一人で食べてるの」と聞かれたことも。

増田さん（以下M）：別に僕はスタバとかで一人でご飯食べてますよ？

S：スタバはなんて言うかアメリカンな雰囲気というか、個でいても浮かない空気があるような気がします。

栗原さん（以下K）：スタバは敷居が低いように思いますね。

M：確かに一人だと携帯見ちゃいますね。メールが来ているわけでもないのに。インターネットを見たりして。

H：そこで、学食のような場で一人でいられるには、ということなのですが、とりあえず学校に居る間だけでも個立を強制させようかと。まず友だち作りを助長するような共同作業を止めさせることですね。フレセミ（フレッシュマンセミナー：HRのようなもの。卒業必須単位）でやどかり祭の話し合いをしたりするのも禁止にする。前に「フルーツバスケットをしよう」という提案があって、当然却下したらずいぶん恨まれたみたいですね。

佐藤さん：じゃあ先生のフレセミでは何をやっていたんですか。

H：レポートの書き方とかですね。授業である以上しっかり評価をしますから、単位を出さなかった学生もいます。

S：フレセミって授業だったんですか。

K：フレセミに単位を出さないなんてことがあるんですね。

H：単位が設定されているのだから当然でしょう。そうでないと、単に出席させるための脅しになってしまうじゃないですか？

S：どちらかという、フルーツバスケット的なノリだったような。

永延さん：そうですね。フルーツバスケットはやりませんでしたけど、そんな感じでした。

T：いかんねえ。

M：いったい学生は何をやって単位をもらえなかったんですか。

H：課題のレポートが不完全な形での提出だったんです。だから資料をきちんと整えてくれれば単位は出すつもりなのに、連絡が来ない。話し合う機会を放棄している。

佐藤さん：今までは集合ということに重点が置かれ過ぎていたから、共同作業を止めさせて個を強制するという話でしたけど、そちらが苦手な人はどうしますか？それにこういう対策って、集合重視か個重視かどちらかよりになるしかないと思うので、今度は集合を作れなくなるのではないですか？

---

「個立」：「孤立」につながることを避けるため、このような表記にした。檜垣先生はここで「自立」ぐらいの意味で使っており、一人で食事することを「個立（個の強調）」と捉える作成者との間に、食い違いがあることが後日わかった。しかし、「個」にこだわる作成者の姿勢がわかる箇所なのでそのままにしてある。

H：今みたいな集合なら一生作らなくてもいいと思う。それに、たとえ学校で個立（自立）させたところで外との関係があるわけですし。何も一人で閉じこもれと言っているのではなく、心は開いていなければならないし、いざというときには連帯もできます。心は開いているけど、今は友達がいないだけ、一人でいるだけということ。「あえて一人でいるんだ」とアピールして疲れることも無い。確かに、僕も日本人的教育の中に居たから、高校くらいまではそう思っていたけど、今は「一人でいてどこが悪いのか」と、そう思っていますね。

K：それは理屈ではその通りだと思いますけど、「一人でいるところを見られたくない」と思ってしまう自分をどうするのか、ということなんでしょうね。

H：一人でいるのを見られても平気な人間を育てるのは、教育としても大切なことだと思いますね。

\*\*\*\*\*

S：個立させることより人を信頼させることのほうが大事なのは。「私は、自分が一人で食べても変じゃないと思っているけど（友達が今いないのはたまたまだから）、他の人・周りの人がどう思うかはわからない。おかしいと思われたらそれを訂正することもできないので、一人で食べるのを見られるのが嫌」、ということだとも言えると思います。それはつまり、相手に納得してもらおうとか、納得してもらえとか考えていない。相手に自分と同じもの、それは理性なのかもしれませんが、そうしたものを認めていないんですね。相手を自分の理解の及ばない異物、モンスターだと考えるから、相手の目が気になる、怖いのではないのでしょうか。

H：本当に相手を異物と考えているなら、周りの人が何を考えたってかまわないはずですよ。犬に見られたって平気でしょ。やさしい人間関係を営もうとする限り、そこに何か自分と共通のものを見出しているのでは。

S：その共通のものは理性とは違って自分本位のものですね。連帯には向かわない共通のものであって、相手は連帯の対象にはならないでしょう。そういう意味では、共通のものがたとえあっても、相手は異物なんです。

M：おそらく、やさしい人間関係における共通のものとは、キャラとか趣味とか、議論を楽しめる程度の対立にすぎず、ゆるくつながることを目的としたものなんでしょう。

H：言いたいことはわかります。入学式前のイベントもSNSも、そういう視点で、自分と違う人間と仲よくさせ、安心感を与えるためのものなのでしょう。けれど、そこにあるのは、本当の意味でのコミュニケーションがない状態での「異質」や「共通」に過ぎないと思いますね。対話をし続けてみて、他者は本当に自分と違う存在だし、他人を本当に理解することなどできないのでは、という気がしています。どうしても理解できないが理解したい相手が異質な存在なんです。パソコンやノートは異物であって異質ではない。合宿やオリエンテーションを復活させて、いわば無理やり同じ釜の飯を食わせて、解決する問題ではないでしょう。

S：異質の説明はピンと来ませんでした。後半はわかりました。同じ釜の飯を食って関係を作っても、それを維持してくれる拘束力たる共同体がないのだから、関係を支えるのは自分のコミュニケーション能力のみ、ということになってしまう。そういうことなら何も変わらないでしょう。

H：共同体が崩壊しているから支えとなる意識がないというのはそうでしょう。異質については、自分の前提や信条が確認されることなしに、異質とか共通とか言っても茶番に思えるということなのですが。他人をそうした意味で本当に異質だと思っているなら、簡単に人を殺すことなどできないはずです。

\*\*\*\*\*

H：なんとかやさしい人間関係を壊す方向にしたいですね。この関係の中で上手くやれて、一緒にご飯を食べる相手がいれば、それでいいのか、と。こうした関係はよくないと思うのですが。

S：確かにいいとは思いませんが、壊せるとも思えないですね。対話を選択肢に加えるとか、能動的にこのやさしい関係を選んでいると思えるならいいという話も出ましたが、やさしい人間関係の問題点は、全ての関係を、自分が傷つかない・自分が肯定されることを要求する視点から捉えるところにありました。つまり、やさしい人間関係が選択肢になっているなら、もうそこから脱しているということなんです。やさしい人間関係が大前提で、それをベースにして対話や同じ釜の飯関係を試みる、という状態を壊せるとはなかなか思えないです。

H：壊せないですかね。たとえば、日本でやさしい人間関係しか築けていなかった、そういうコミュニケーションしかとらなかった人が、海外に行って見違える、ということはあるでしょう。

S：その例は、まさに日本では変わらないということを示しているのではないのですか。

H：いや、そうとも言えるけど、そういうことではなくて、人は変わるということでしょう。そして、日本でどう変わるかということですが、やはり個立（自立）化を強調して、せめて大学でだけでも一人でやる（そして他人と深くかかわる）ことを強制すべきだと思います。

M：強制しなくても、やさしい人間関係とは違う選択肢があるとわかることが大事なので、今まで通りそう示していけばいいのではないですか。

H：示すだけでいいんでしょうかね。授業で、僕の思っていることを僕以上に上手くまとめた人が対話を拒否することもあって、この言葉はなんだったのかとがっくりする。言葉に重みがない気がしますね。サンデルさんの東大での講義も同じことを感じました。サンデルさんがせっかくさっきの意見ならこう言うだろうということを振ってくれているのに、どうしてそうなるのかな、というようなことを言う。一貫していなくて、最初の意見は本当に自分の考えだったのかと思う。わざと外しているのでしょうか。

K：別にわざと外そうとしているのではなく、せっかくだしとりあえず何か言ってみよう。

それでどこかで聞いたようなことを言ってみる、というだけで、自分が語るという感じではない、ということなのでは。

H：僕の授業では、たまにわざと外している感じの学生さんがいますね。流れに乗らないことで独自性を出そうとしているのか何なのか。それとは違うんですかね。ともかく、そうすることに何の意味があるのか、と思います。

\*\*\*\*\*

H：今のところ、個立（自立）させちゃいかんという説得的な根拠は見つかっていないと思うので、どうやって個立（自立）化を強調して、一人でご飯を食べてもなんとも思わなくなるのか、ということですが、もうこれは、僕が身をもって一人で食べて見せ続けるしかないのかな。後は、友達から切り離して、共同作業をさせるイベントも止めさせて、ひたすら友達以外の人と話をする場を定期的に与え続けるとか。ランダムにペアを作らせるまでやるとやりすぎな気がしますし。どう思いますか。

S：いや、私は個別作戦には反対なので。

H：その理由は？

S：定期的に、例えば週一とかで、友達になろうとしなくてはいけないなんて、考えただけでも疲れすぎるからです。

M：別に友達にならなくてもいいのでは？

S：そうですね、自分に敵意がないことを示したり、よく思われたいと考えたり。やさしい人間関係を作ろうと試みるだけでもくたびれてしまう気がします。（あるいは、やさしい人間関係に組み込まれた人は、全て「トモダチ」だということ）。

H：毎回試みているうちに、いつか疲れてやらなくなるのでは？

S：いや、疲れたらひきこもるでしょう。そうなる自分がリアルに想像できてしまいます。なので、そうした個立化作戦は、自分にしんどいという一点のみで拒否したいと思います。

H：今のは少し説得力がありましたね。でも、結局、じゃあどうすればいいのか、ということが問題になってくるのですが。

### 【まとめ】

「ではどうすればいいのか」。つなげようとする大学と個立させようとする檜垣先生。大学側の案に賛成だが、檜垣先生的要素もないと不十分だとも感じるはっきりしない私。

檜垣先生の言うところの「異質」とはどのようなものか。自分の理解が及ばないものが異質だということなら、やさしい人間関係におけるモンスターとしての異物観と、一見同じに思える。しかし、「相手のことを理解しようとしたか」という決定的な違いがあるのではないか。相手を理解しようとして言葉を交わすうちに、自分の前提や信念がはっきりしてきて、かえって、相手と自分に対立していること・まったく違う存在であることが明確になってしまう。おそらくそうしたとき、もはや相手のことを「異質」としか表現できない

くなる。そのように理解した。

ならば、そうしたプロセスを経ない異質など、茶番にしか思えないというのも納得できる。しかし、そうした意味で相手の異質さを深く自覚するとは、相当に困難なことである。「人格を手段としてのみ扱わないように行為せよ」というカントの考えや、「まず隣人が発見されねばならない」という意味でのイエスの隣人愛が、われわれの心に響くのは、そうすることが、およそ不可能に思えるほど困難であると知っているからではないだろうか。では、なぜ困難なのか。それは、相手の異質さを自覚することは、「自分が特別な存在である」とか「自分は価値ある存在である」と思うのをやめることであるからだ。実際、自分のことで頭も心もいっぱい、目の前の人間の人格など風景ほどの現実性も持つかどうか、という現状がある。そこで見いだせるのは、異質な他者などではなく、自己愛を満足させたり、自己肯定感を得るための道具なのだ。こうした「特別な自分とその他の道具」というものの見方をやめる、すなわち、自分自身に価値など無いと自覚することが、相手の異質さを深く自覚するということである。こう考えたとき、「異質な他者に向き合え」と言うことは、「ニーチェになれ」と言うことと同じくらいの重みを持って迫ってくる。客観的価値を否定したニーチェに続け、と。

話が大きくなりすぎたので少しまとめる。つまり、イエスの時代から、異質な他者と向き合っている人などごくわずかであって、特に、対話の文化の無い日本では、その傾向が顕著であった。ただし、個性重視の教育のせいでその傾向に拍車がかかり、共同体の崩壊のためさらに不安定になっている。そう分析することもできるだろう。ゆえに、同じ釜の飯を食わせるなどして、擬似的な共同体を作ろうとしている大学の試みは、問題解決の方向性として間違っていない。大学がすべきことは、擬似的共同体を増やすことだと私も思う。「このテキストを理解するため」や「この分野を発展させるため」など、ある目的のための関係において自分の役割を果たすことを学べればよい。そうすれば、コミュニケーション能力以外にも人を計る物差しがあるとわかり、一人でご飯を食べることに対し、「友達も作れない駄目なやつ」と評価を下すことも少なくなるのではないか。

ただし、これは根本的な解決ではない。人を評価する方法がコミュニケーション能力以外にもあると知り、目的のための関係を様々作ったところで、それはやさしい関係が相対化されただけなのである。自分が傷つかないやさしい関係がベースにあり、その延長に目的が設定されている。相変わらず、やさしい人間関係が全ての前提であり、自分が作れる関係としての選択肢になっていないのだ。それでは、何かミスをすれば断崖絶壁に立ち尽くす、ということになってしまう。これは、対立を避け続けて逃げ道が無くなり行き詰るという状態である。ならば、異質な他者と向き合う対話をすればいいのだが、それは、「ニーチェになれ」というレベルで重いものであるばかりか、崖っぷちにある何とか作ってきた自分の場所（やさしい人間関係）から足を踏み出せと、要求するものなのだ。そんなことをすれば落ちこちて大怪我をするに決まっている。そんなのはごめんだから、足場が用意されたら踏み出そう（対話をしよう）と思う。しかし、誰かに「ここは安心ですよ」と

言ってもらってから踏み出すというのは、誰かにやさしい人間関係を用意してもらおうということだ。それでは当然、問題は解決しないだろう。予感として、自分でやらねばならないのだと思う。安心できると納得させてもらおうとするのではなく、自分自身で何かをどうにかしたとき、実は崖っぷちに立っていたわけではなかったと気づき安心することができる。そして異質な他者を発見することもできるのだろう。しかし、何をどうすればいいのか。課題である。